

大豆「里のほほえみ」栽培技術について（6月～）

令和4年6月

下都賀農業振興事務所

〔栽培のポイント〕

- ①土作りを行い、根粒菌の活性化と地力向上を目指しましょう
- ②ほ場の排水対策を実施しましょう
- ③ほ場の水分をよく見て、播種をしましょう

1. 土づくり

大豆の窒素吸収量の5～7割は、根粒由来の窒素と土壌由来の窒素です。

根粒や土壌窒素の効果を高めるためには、土作りが重要になります。

根粒菌について

- ①土壌 pH が低いと根粒菌がつかない。
- ②土壌の透水性／通気性が悪いと働きが弱まる。
- ③開花期以降は新しく増えない。

生育初期～開花期までいかに継続的に根粒菌をつけるかが重要です。

pH6.0～6.5、土壌中の酸素、適度な水分を保つことで、根粒菌の活性を高めることができます。

土作りについて

○**鶏ふん堆肥**は窒素成分比率が高く、土壌改善効果とともに肥料効果が期待できます。

大豆単作の場合ならば、100～200kg/10a を目安に施用しましょう。

※麦跡の場合、堆肥施用よりも適期の播種作業が重要になります。苗立数の確保に努めましょう。

○麦稈をすき込んだ場合は、窒素飢餓対策として石灰窒素を 10～15kg/10a 施用しましょう。

○作土深は 20cm を確保しましょう。ただし、作土深 10cm 前後の圃場は、数年かけて計画的に深耕し、土づくり肥料を施用しましょう。

【土づくり資材の施用例】

種類	施肥量	効果	留意点
苦土炭カル	60～ 100kg/10a	・低 pH の改善 ・カルシウムの補給により、生育改善	低 pH の水田が多いので、積極的な施用をしましょう
ようりん、 苦土重焼燐	60～8kg/10a (ようりん)	・黒ボク土での燐酸欠乏を防ぐ ・燐酸の補給により、生育改善	土壌診断で、乾土 100g 当たり 10mg 以上が目標です

【基肥の施用例】（目安 N：2kg P：8kg K：8kg /10a）

圃場条件	基肥	追肥	
		施肥量	時期
一般的な圃場	BB-500 号(40kg/10a)	なし	
地力が低く 収量水準が 低いほ場	大豆専用ひとふりくん (60～80kg/10a)	なし	
	BB-500 号(40kg/10a)	尿素または硫安 (窒素成分で 5～10kg/10a)	開花期～開花後 10 日頃

2. 排水対策

播種後～生育初期にかけて、最も湿害リスクが高くなります。

降雨後に、ほ場に水が残らない状態を目指しましょう。

特に出芽不良は、減収の被害が大きくなりやすいので注意!!

○ほ場周囲に明きよを設置しましょう。

排水口は低く掘り下げて排水路につなぐこと。

○排水性が悪い場合は、ほ場内にも 5～10m 間隔で明きよを設置しましょう。

○水田転換畑 1 年目の場合は、プラソイラ等による心土破碎を行いましょう。

降雨後の土壌の乾きが遅いほ場でも、心土破碎は有効です。

※水田転換畑 1 年目では、作土が浅く耕盤が存在します。

水がたまりやすく、根張りも劣るため、大豆で収量を上げるために積極的に心土破碎や作土深の確保を行いましょう。

○明きよや排水口を点検し、崩れていた場合などは補修や溝さらい等を実施しましょう。

3. 播種

播種適期： 6月15日～7月5日

播種量： 4.5～6.0kg/10a

播種密度： 11,000～17,000 株/10a (畦幅 60～70cm、株間 10～15cm)

○ほ場が湿気た状態での播種は、出芽不良や初期生育の不良につながります。

適期が梅雨と重なって、いつまでも湿気た状態が続くときは、無理をせずにほ場の状態が良くなるまで待ちましょう。

○播種が遅れて7月中旬以降に播種する場合は、播種量を1～2割程度多くしましょう。

○病害虫防除の徹底のため、播種前には必ず種子消毒を行きましょう。

播種が早すぎると	播種が遅すぎると
<ul style="list-style-type: none">・主茎が伸び、倒伏しやすくなる・蔓化・過繁茂による病虫害の多発・株内での熟ムラ・裂皮粒の発生が多くなる	<ul style="list-style-type: none">・生育不足による減収・時には早霜で成熟に至らない

初期生育の確保状況が、収量に大きく影響します。

